

本稿では、大学生が主体的に国際協力活動に関わる回路を、大きく3つに分類して検討した。すなわち、1)大学の正課教育(海外体験学習、卒業論文のフィールドワークなど)、2)大学の課外活動(サークル活動等)、3)学外の活動(政府機関、JICA、NGOなど)である。それぞれ、活動内容、メリット・デメリット、活動に関わる学生の意識等において、特徴を持っていた。また、学生たちの中には、複数の回路を通じた活動を体験しながら、自らの考えを深化させている者もあった。

実際に国際協力活動に関わった体験を持つ学生たちの聞き取りから浮かび上がってきたのは、多くの学生たちが、自らの体験を経て、テレビや本などのメディア、講義を通して知っていた「国際協力」や「貧困」という抽象的観念や、「自分も何とかしたい」という思いを、より具体的なものとして地に足をつけて考える「当事者性」を芽生えさせているという点である。もちろんすべての学生がポジティブな当事者意識を持ちうるわけではない。国際協力に関わることによって、逆にその難しさを認識し、相互の距離を感じている学生も存在する。積極的な当事者意識を持つ学生の多くは、協力の相手となる生身の人に出会い、束の間ではあってもその相手の生活する場で交流するという「場所の体験」が大きなインパクトを与えていた。海外での活動だけではなく、サークル活動や、JICA、NGO等でのボランティアが同様の体験となっている例も見られた。

多くの課題も残されている。海外体験学習においては、学生たちが受動的な「お客さん」になってしまう危険もある。また持続性という面では、サークルは4年間という限られた期間での活動であり、メンバーが入れ替わってしまう。しかし世界の途上国の人口を年齢別で見た場合、その最も大きい比率を占めているは、ユースの年齢層である。そのユースが主体となって同世代を見据えた国際協力を考える意義は、非常に大きいと考える。(主指導教員：熊谷圭知)

奈良盆地における干ばつ気候の地域特性 —明治末～昭和初期の資料に基づく水文気候学的研究—

丸本 美紀

古代、政治の中心が置かれていた奈良盆地では、ピーク時には1万を超える溜池が分布していたとされている。また奈良盆地には、「大和豊年国不作」「大和豊年米食わず」などという諺が伝えられており、これは奈良盆地が豊作の年には他の地域は大雨で不作になるという意味である。このように奈良盆地では昔から干ばつに多く見舞われ、水争いが絶えず、溜池に加えて隠し井戸なども作られてきたとされている。

先行研究では奈良盆地が干ばつという気候特性を持つために溜池が多く築造されたという記述が多くみられるが、どの程度の干ばつ地域であるのか、またその地域分布など定量的なものは明らかにされていない。そのため、本研究の目的は、奈良盆地がどのような干ばつの気候特性であるのか、さらに盆地内での干ばつ時の水文気候の地域分布を明らかにすることを目的とした。

また、奈良盆地では雨が少ないという気候特性を持つ反面、局地的な大雨による洪水も繰り返し起きていたといわれている。奈良盆地のように大雨と干ばつのような異常気象が混在している場合、30年平均値である平年値で気候特性を見てしまうと、大雨と干ばつ(少雨)の両者が相殺されてしまい、平年値が奈良盆地の気候を必ずしも代表しているとはいえないと考えられる。そのため、「年候」という考え方を取り入れ、以下の方法で解析を行った。

通常、気候特性の研究・解析を行う場合は、気象庁によるアメダスの気象データを用いることが多い。しかし、現在の奈良県内における気温・降水量は6ヵ所ですしか観測されていないため、アメダスよりも観測地点の多かった区内観測所と呼ばれる1905年～1935年のデータを使用した。

本研究において、用いた解析方法は以下のとおりである。

① Thornthwaiteの最大大可能蒸発散量による気候学的水収支の計算

② Martonneの乾燥指数

③ Köppenの年候

また、ハイサーグラフの作成と年降水量と月降水量の変動のグラフ作成や①の Thornthwaiteの最大可能蒸発散量による気候学的水収支の計算に基づき、干ばつ事例(1913年7月, 1922年8月, 1924年7月)を抽出し、GISによって月平均気温, 月降水量, Martonneの乾燥指数の分布図の作成を行った。

以上の方法によって得られた結果は以下のとおりである。

奈良盆地内の Thornthwaite法で求めた気候学的水収支計算の結果は、水分不足が起きる季節は、夏季、特に7月～8月に顕著な水分不足となる例が多かった。水分不足となった原因をまとめると、1913年7月の月平均気温は奈良県全体で平年よりも低かったものの、盆地内は他の地域よりも気温が比較的高く、月降水量が平年の10～40%であったために水分不足となった。1922年7月は月降水量が平年の20%～80%の雨量であった。しかし、月平均気温が平年より2℃ほど高くなったために蒸発散量が多くなり、水不足が起こった。1924年8月は月平均気温が平年よりも1℃～2℃高く、さらに月降水量が平年の30%程度と極端に少なかったために顕著な水分不足が起こった例であった。

奈良盆地は盆地気候であるため、夏季に高温となりやすい気候特性を持ち、さらにフェーン現象が起こりやすく降水量が少ないという気候特性を持つ。この気候特性が干ばつという現象を起こりやすくさせていると考えられる。

奈良盆地内の気候の地域分布を見ると、北部と南部で気温や降水量の特徴が分かれる傾向が見られた。奈良盆地南部の八木付近は特異な傾向がみられ、この八木の特異性が北部と南部の特徴を分けた原因と考えられる。特異な傾向は事例によって異なり、1913年7月の例では八木の降水量が他の地域と比べてやや多かった。しかし1922年8月と1924年7月は八木付近の降水量は他の地域と比べてやや少ない傾向にあった。

奈良盆地内における Köppenの気候区分の解析結果は、平年値では Cfaであるが、年候を用いると Cfaと Cw気候が約半分ずつの割合で出現した。このことは奈良盆地内では降水量が一定ではなく、月々の変動が大きいということを示している。このような動的手法である年候を用いることで、月単位における詳細な気候特性を示すことができた。

(主指導教員：長谷川直子)

■2010年度 卒業論文要旨■

信用に基づく農産物直売所

一埼玉県深谷市の道の駅を事例に—

児玉 恵理

多種多様でグローバル化した流通商業形態が存在する中で、農産物直売所が注目されている。消費者が、大量農薬の使用と産地偽装などの問題に対し、不安を抱いていることも影響している。本研究は、顔の見える農業といった社会的・文化的な観点が必要になる埼玉県深谷市の道の駅併設型農産物直売所における調査分析を行った。

農産物直売所は、かつて日本各地に存在していた定期市と似たような役割を果たしていると考えられる。そこで、農産物直売所と定期市の比較検討を行った。定期市は、構成員の大部分が定着農耕民からなる社会の中で、農民の側に発生した若干の余剰をもとに、交換の場として成立した。直売所においても、農協に出荷した農産物の余り、例えば規格外商品を直売所に出荷していることがある。相対取引を行う定期市と農産物直売所は、余剰物の交換の場という点で共通している。

また、定期市や直売所では、生産者は栽培して、収穫した野菜を自分で店頭で並べ、値段を自由につけることができ、消費者の声を直に聞くことができる。さらに本論文が対象とした深谷市の道の駅併設型の農産物直売所は道の駅が果たすとされる、休憩機能、情報発信機能、地域振興機能という三つの機能も新たに付